

# FADO

# 42

Abril 2004

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

最近とみにポルトガルの関連の番組が組まれたりし始めた。そうなると、何故か、ポルトガルが遠のいてゆくように思うのは、私の心の偏狭さゆえだろうか。ポルトガル関連の本を見つけては、買いあさっていた10数年前の日々が懐かしく思える。今は、パソコンのインターネットでポルトガル関連の情報は、尽きぬほど得ることができる時代だ。先日、ネットサーフィンしてファド関連のポルトガル語のホームページにたどり着いた。そのホームページには、カルロス・ゼルの歌が流れていた。懐かしさと嬉しさに導かれるように、私はその掲示板に投稿すべく、キーボードを叩いていた。そのことに、彼の死以来、ポルトガルから逃げるように遠ざかっていた私自身がびっくりしたほどだ。それに対する返事が2通メールで届いた。一人はカルロス・ゼルのファンブラジルの女性、もう一人はポルトガルの男性の詩人からだった。その詩人は「さようならカルロス・ゼル」というファドまで創っている。簡単にありがとうの一言のメールを打てばよいものを、なまじ、ちゃんとした文章を書こうと思うがゆえに、いまだに返事を出していない始末である。ともかく石のように固まりつつある記憶力は、ポルトガル語を頑なに拒否する。ゆっくり時間が取れたときに…なんて言いながら、時は無情にも過ぎてゆく。

今年にはヴィンセスラウ・デ・モラエス生誕150年にあたる。彼が後半生を過ごし、その地で亡くなった徳島でのディナーショーが、秋頃に企画されている。モラエスの生き方を反映したようなステージを作れたらと思ひ、彼の著作を読んでいるのだが、それがなかなか一筋縄でいかない。一人の人間の生き様をそう簡単に捉えることなどできるはずもないのだが、彼の生き方は、一言でいうと「重い」。一人、彼の書簡集などを読んでみると、異国日本でのやり場のない孤立感、人間としての孤高さを支えている強い「追慕の念」の暗闇に引き込まれそうになる。「モラエス」のいういわゆる「追慕」=「サウダーデ」を通して、何を伝えたいのかを先ずははっきりさせない限り、ステージの骨子は組み立てられない。その作業は私に「何故、ファドを歌うのか?」という問いまで突きつけてくる。ただ単に「好きだから」だけでは、容赦してくれそうもない。雑事をしている、電車に乗っていても、常に頭の片すみにこびりついて離れない。忘れることができるのは、歌っているときだけである。そして、時は無情にも過ぎてゆく。

そういえば、10年程前、モラエスの遠縁にあたるという男性に会ったことがある。たしか、ヴィンセスラウという姓だったが、名前は忘れた。しつこく付きまとわれ、ちょっと困った記憶がある。逗留中のホテルのフロントから電話があり、「どうしますか?」と聞かれたので、「会いたくないから、いないと言ってください」と言ったのに、部屋まで来て、ドア越しに激しくドアを叩いては、「会いたいから、入れてくれ」と言う。私は、恐ろしさに、息を潜め居留守を決め込んだ。「モラエスさんごめんなさい」と心の中で呟きながら。

9月に制作したCD「ギターに寄せて」の注文が、ときたま入ってくる。ホームページを読んでアクセスしてきてくださる方に混じって、レコード屋さんから、直接問合せがあったりもする。ラジオを聴いた方が、レコード屋に足を運んでくださった結果だ。楽しみに待って下さっている姿を勝手に想像しながら、一人一人に札状のようなものを添え、宛名を書くのは、楽しい作業だ。「月田さんが出しておられるCDを全て送ってください。」なんて言われようものなら小躍りしてしまう。ところが残念ながら、今までの5枚のCDは廃盤。でもどうしてもと言う熱心な方には、虎の子の「ありがとうアマリア」を送らせていただいたりする。ライブもそうだが、聴いてくださる一人一人の顔の見える活動は、本当にありがたいものだと思う。直接、聴いてくださる人と繋がっているという満足感のようなものが、マイナーであることの辛さを帳消しにしてくれる。食べ物にされたりしたりする(言葉は悪いが)ヒエラルキーを伴う集団におもねることなく、聴いてくださる一人一人を大切に歌ってゆこうと今更ながらに思う今日この頃である。

## 「人生よありがとう」に寄せて

2月のマヌエルのライブに懐かしい顔が並んだ。NHKの「人間マップ」(1994年放映)のY氏、「平成古寺巡礼」(1997年放映)、「一本の道」(2000年放映)のK氏が連れ立ってファドを聴きにきてくれたのだ。二人とも私よりはずっと若くて有望な番組制作スタッフだ。仕事を離れて会うのは初めてだった。ワインで乾杯して再会を祝した。どの番組でも私は「餌食」にされ、「裸」にされ、自らが感じたことを言葉で「伝える」ことの難しさを味わされた。収録の終る頃には、もう二度とテレビには出たくないと、痛む胃をさすりながら思ったものだ。だからこそ余計に「戦友」のような懐かしさをおぼえるのかもしれない。いつもよりたくさん飲み、こみあげる熱さの中で歌った。月田を「乗せる」ことに関しては、つぼを得たりの彼らを前にして、観客を乗せるのでなく、観客に寄せられる歌手であることを痛感した夜だった。

数日後、K氏から、彼の企画・構成による番組のビデオが届いた。昨年9月にNHK・BS2で放映された「世紀を刻んだ歌『人生よありがとう Gracias a la Vida』—南米歌い継がれた命の賛歌—」どうしても観たかった番組だった。

人生よありがとう

こんなにたくさんわたしにくれて

人生は私に二つの星をくれた。

それを開くと わたしははっきりと見分けることができる

白いものと黒いものを

星をちりばめた空の高みを

人ごみの中から愛する人を

人生よありがとう

こんなにたくさん私にくれて

人生は私に笑いをくれ涙をくれた

私の歌をつくるふたつのものを

あなたの歌は 私の歌

全ての人の歌 それは私自身の歌

人生よありがとう

ギターを片手に、チリ中の慎ましく生きる人たちによって歌い継がれてきた歌を求めて歩き回り、そんな人々への限りない共感を歌いつつ、自らを「無用な人間」と切り刻み、孤独感の中、49歳で自らの命を絶ったビオレータ・パラの晩年の歌「人生よありがとう」。

その歌は、私が弾き語りできる数少ないレパートリーの一つでもある。そして弾き語りを教えてくれた友も、今はこの世にはいない。私はビオレータ・パラの、そして、彼の形見としてこの歌を大切に歌わせてもらっている。この歌を歌うたびに、人を愛しながらも、不器用にしか生きられなかった二人が私の心の中に生きているのを感じる。そして、「人生よありがとう」は、チリで、アルゼンチンで、自由を求めて戦った人たちの心の支えでもあったということをこの番組で知った。人は逃れられない孤独の中で苦しみ、だからこそ共感を求めて生きているのだと。生きていればこそその悲しみ、苦しみ、喜び、そして出会い・・・「人生よありがとう、こんなにたくさん私にくれて」



## モラエスと神戸

辻 雄史

1996年10月NHKの「世界わが心の旅」で「ポルトガル-父と子のサウダー」を見て深い感動を覚えた。作家新田次郎氏のご子息である数学者・エッセイストの藤原正彦氏が、父子それぞれが訪れた思い出の地「ポルトガル」を旅する番組である。1980年新田次郎氏は、ポルトガルの海軍軍人で文人外交官であったモラエスを主人公に「孤愁-サウダー」という新聞連載小説を書いている最中に急逝された。父の最後をみとったご子息が、その翌年父の「宝物」(取材ノート)を携えて、モラエスや父のサウダーを求めポルトガルの各地を巡っている。その模様は「父の旅 私の旅-サウダーの石」(新潮社)として著わされている。冒頭のテレビ番組は、それから15年後に再訪した時の一つの場面であった。ちなみに「サウダー」とは、ポルトガル人特有のメランコリックな心性の表現とされるが、藤原氏によれば「愛する人やものの不在により引き起こされる、胸の疼くような、あるいは甘いメランコリックな思い出や懐かしさ」と言われている。

さて、本題のモラエスの話に戻そう。一般に親日家といわれる外国人は数多いが、モラエスほど日本と日本人を愛した外国人はいないであろう。定本「モラエス全集」などの訳書が多い花野富蔵氏は、「日本人モラエス」(青年書房刊)という著作まで残している。

ヴェンセスラウ・デ・モラエスは、1854年リスボンで生れた。1875年海軍兵学校を卒業し、海軍士官となり、世界各地を廻るうち欧米列強の植民地的支配を受けていた東アジアの中で、国家国民をあげて目覚ましい発展を遂げつつある日本に強い関心を持つようになった。1889年(明治22年)の初来日で長崎に上陸して以来、来朝を重ねる毎に、日本の自然、歴史、国体や日本人の気質、魂に惚れ込み、日本への憧憬はますます深まっていった。

小説「孤愁」では、1893年海軍少佐、マカオ港務局副司令として、大砲購入のため来日する時から物語が始まる。ヨーロッパ世界で大航海時代の道を開き、日本にはじめて鉄砲やその製造技術を伝えたポルトガルの軍人が、極東の新興国に武器の買いつけにくるとは歴史の皮肉であろうか。当時は英仏の隆盛に対してポルトガルやスペインの没落は顕著であり、神戸大阪でもポルトガルは単独の領事館をもたず、フランス領事に事務の一部を代行させていた。

数年のち大砲購入の交渉が成立した際、モラエスは、大阪砲兵工廠幹部を伴った陸軍省軍務局長児玉源太郎中將(当時)に大阪宗右衛門町の料亭へ招かれているが、開宴に先立ち中將が「ポルトガルとわが国とは深い深い関係があります。なにしろ日本に鉄砲をもたらし、西欧の文化を持込んでくれたのは貴国ですからね。」と歓迎挨拶をしているのは大変興味深い。

その後モラエスは、本国政府やマカオ政庁内の状況変化からマカオ港務局副司令の職を解かれるが、リスボンに帰還せず、日本への永住を決意する。一方、友人たちの尽力もあって神戸にポルトガルの副領事館が設けられることになり、初代の副領事に就任する。1898年(明治31年)のことであった。なお、この前年にはリスボンで大著「大日本」が出版され、翌年には認可状が下付され正式領事となった。

1900年(明治33年)11月モラエスは、大阪松島で芸者をしてきた徳島出身の福本ヨネ(当時25歳)と生田神社の神前で結婚式を挙げ、神戸一の料亭「常盤楼」で披露宴を行っている。神前結婚が一般に行われるようになったのは大正になってからのことであり、しかも当人が外国人であったから極めて「神秘的な結婚式」であったという。この頃モラエスは、神戸大阪駐在領事としてもっとも脂が乗りきっていた時代で、同年3月には神戸市水道通水

式に各国外交官団を代表してフランス語で祝辞を述べている。ちなみに、水道事業の水源はモラエスがよく散策をし、茶屋で休憩をした「布引の滝」の水系であり、その財源は日本初の外貨地方債として知られる英ポンド債であった。

1903年、モラエスはおヨネとともに舞子浜の海水浴場に遊んでいる。当時外国人が訪れる海水浴場は神奈川県大磯と須磨の境浜とここ舞子浜ぐらいであった。「舞子」は古くから白砂青松、風光明媚の地として有名である。今や眼前には本州と淡路島を結ぶ世界一の長大橋「明石海峡大橋」が架かっている。そして海岸は、自然の砂浜でなく、ケイソンの岸壁と巨大なアンカレイジが築かれているが、舞子公園の松林と旧有栖川宮別邸跡に立つ「舞子ビラ」の姫小松がそのまま緑陰を残し往時を偲ばせている。潮の香漂う緑豊かな神戸の景勝地として訪れる人も多い。

既述のとおり「孤愁」の物語は作者新田次郎氏の急死によって絶筆となり、モラエスとおヨネの新婚生活の途中で中断している。少しその後の経過をたどると、1912年(大正元年)8月に、おヨネが持病の心臓病で死去している。彼女の死を挟んで、この年の7月には、モラエスが幾度か拝謁し尊敬していた明治天皇が崩御され、また可笑しなことに9月には神戸大阪駐在総領事に昇進しているのである。しかし、モラエスは、彼女の菩提を弔うべく公職から引退して、おヨネの眠る徳島へ移住し、文筆活動しながらおヨネの姪コハルと一緒に暮らすようになるが、そのコハルも肺結核で死亡してしまう。晩年二人の冥福を祈りつつ孤独に生きたモラエスは1929年(昭和4年)徳島の寓居で、75年の生涯を終えた。一人になってからマカオ時代の妻亜珍や神戸の領事が写し取って世話をしたいと申し入れたが、それも断り、徳島の地を離れることはなかった。

最後に本稿を執筆するにあたり、秋晴れの休日に舞子から高速バスで徳島へ渡り、阿波おどり会館からロープウェイに乗って、眉山山頂の「モラエス館」を訪れた。「モラエス館」の案内では、「日本を愛し、眉山の緑を愛し、山麓の伊賀町(モラエス通り)に住み、文筆により徳島の風物を海外紹介せられたポルトガル人故モラエス翁を顕彰するため、(中略)1913年(大正2年)7月モラエス翁は元海軍中佐、神戸総領事の栄職を捨て、(以下略)」と説明されている。また、眉山の麓にある潮音寺にも立ち寄り、「おヨネ」と「コハル」が一緒に眠るモラエスの墓所にも参って来た。モラエスは今も徳島の多くの人々に愛され、ひいては遺跡や遺品が、貴重な文化遺産として国際色豊かな素晴らしい観光資源にもなっているのである。

モラエスが日本で過ごした神戸、徳島の期間は、それぞれ15年、16年と二分されるが、外交官として大活躍をした一方の神戸では、ほとんどの市民がモラエスの存在を知らず、神戸市役所南の東遊園地(旧居留地の一画)の木立の中に「モラエス翁像」が物静かに立っているのみである。ただ、陳舜臣氏の「神戸ものがたり」など多くの識者によって広く紹介され、最近では神戸新聞社の「神戸ゆかりの50人」に平清盛、坂本竜馬や伊藤博文などと並んで「語り継ぎたい」人物として推挙されているのである。

## [追記]

徳島の「モラエス館」を訪れた時「モラエス生誕150年記念イベント」の案内チラシをいただいた。それは、県立文学書道館での、四国放送制作ドキュメンタリー「異邦人モラエス」の上映と東京外大名誉教授岡村多希子氏による「モラエスの手紙-ヴァスコ宛私信について」の講演であった。本稿は、「孤愁-サウダー」の筋に従い書いたものであるが、モラエス研究の第一人者たる岡村先生には「モラエスの旅-ポルトガル文人外交官の生涯」という380ページにも及ぶ大作がある。ぜひご一読いただきたい。

(神戸在住)

# cartas

●BSの「公演通りで会いましょう」観ました。しばらくコンサートに行けず、お逢い出来なかった事もあり、とても良かったです。演歌「氷雪の海」にはビックリでしたが、ポルトガルギターが入って、眼を閉じて聴けば何となくファドに聴こえました。歌詞をサウダーデのものに替えれば、ファドになるかも... 楽しかったです。[港町コンサート] また青森でできればいいですね。(N)

●はじめまして。たった今、何気なくつけ、途中からしか見られなかった事を後悔したNHK BS2の番組を見終えたところです。月田さんのファドに心の深いところが涙を流しました。マドレデウスやドゥルス・ポンテスが好きで、ファドに興味を持っていますが、アマリア・ロドリゲスを聴いた事がないので、ファド好きと公言するのは少し憚られます。

月田さんのおっしゃった言葉。いいですね。その通りだと思えます。歌いながら、聴きながら、年を重ねていく事がずっと続けられるなら、良きものが廃れることはないのですものね。失礼ながら、今日まで月田さんを存じ上げなかったのですが、この偶然に感謝して、これからの月田さんのご活躍をお祈りしています。(K)

●BS放送でのお三方(月田・野上・上川さん)、トテモステキでした。云うことなし。話の出ている「港町コンサート」は、何とか月田ファンが協力して実現させてみたいですね。その昔、仕事で全国津々浦々の漁港行脚をしていたので、それなりに知識はあると思っています。釧路・八戸・銚子のような大きな漁港より、たとえば根室・気仙沼のようなところがいいんじゃないでしょうか?(京都/T)

●月田さん、公園通りのご出演おめでとうございます。生が一番である事には変わりはありませんが、広く、多くの皆様に知っていただくには、やっぱりテレビ出演が必要でしょうね。生意気な

言い方でごめんなさい。暗いはしけのぼんぼんほと聴こえてきたら思わず手のひらで膝をたたいて調子をとってしまう位、この曲が大好きです。(N)

●初めまして。たまたまNHKハイビジョン「公園通り」をスイッチングしたら、「氷雪の海」の場面でした。演歌とも知らず、聞きほれ、酔いしれてしまいました。「難船」も素敵でした。久しぶりに身も心も揺さぶられる歌に出会えて良かったです。「くらはしけ」を聴きそこなったのは残念ですが、さっそくCDを購入して聴くことにします。「氷雪の海」もCDで聴ければと念じております。(K)

●番組の中で歌われた「氷雪の海」はすばらしいファド的演歌、又は演歌的ファドでありました。2004年門出を飾るにふさわしい歌でした。月田さんおめでとう! 今年益々のご活躍をお祈りします。  
「闇路 流るるファド歌うと 溢るる哀しみや」(T)

●昨日のNHKを見ました。テレビで生で歌うというのも、ファドを広めるにはきっとプラスになるでしょうね。これでまたファンになる人もいられるでしょうし。いい音楽といつ出会えるか。出会う機会は多いほどいいものです。月田さんの演歌には驚きましたが、以前コンサートで五木さんの「愛の水の中花」を歌ったこともあったから、そういう意味では意外と言うほどのドキドキはなく安心して聴けました。でも、ファドに触発されて作った、と弦さんは仰ってましたが、やっぱり演歌だな、と思いました。ポルトガルギターで大分ファドっぽくなっていただけ。でも、最新アルバムの「ギターに寄せて」もそうですが、ファド以外の月田さんも素敵ですね。是非また、色々な番組に出てください。楽しみにしています。あと「港町コンサート」も。実現したら素敵だろうな。(Y)

# fados canções

蜜の恋 苦い恋

作詞 アマリア ロドリゲス  
訳詞 カウド ヴェルデ

私の恋は  
秘めたままでいなければ  
けれど涙は流せます

流しつづける涙で  
海が溢れても  
恋心は抑えられない  
私の恋の何という罪深さ

罪深い恋  
恋のための恋  
蜜の恋  
花ひらく恋  
苦い恋

春 訪れたのは  
ツバメだった  
あの頃は何も知らなかったのに

燃え上がる恋  
愛されての恋

昂まるファドは  
暗い旋律で歌い  
痛みの恋を泣く

私の恋は  
心痛む恋  
燃え上がる恋  
暗い旋律で  
泣く恋  
暗い旋律で  
ファドは昂まり

愛されていてもお満たされる  
ことのない恋の痛みを

AMOR DE MEL, AMOR DE FEL

LETRA : Amália Rodrigues  
MUSICA : Carlos Gonçalves

Tenho um amor  
Que não posso confessar  
Mas posso chorar

Choro a chorar  
Tornando mior o mar  
Não posso deixar de amar  
O meu amor em pecado

Amor pecado  
Amor de amor  
Amor de mel  
Amor de flor  
Amor de fel  
Amor maior  
Amor amado

Foi andorinha  
Que chegou na Primavera  
Eu era quem era

Tenho um amor  
Amor de dor  
Amor maior  
Amor chorado  
Em tom, menor  
Em tom menor  
Maior o fado

Fado maior  
Cantando em tom de menor  
Chorando um amor de dor  
Dor de um bem e mal amado



